

「未来」を考える——コロナ禍と地球温暖化の地球の中で

安成 哲三

新型コロナウイルスの感染（コロナ禍）は、国内も世界もさらに拡大しています。国内では首都圏には二度目の緊急事態宣言が出され、全国的にも新たな変異ウイルスの拡大も始まっています（2021年3月8日現在）。

このような中で、「未来を考える」とは、何をノンビリしたことを、とひんしゆくを買いそうですが、私はこんな時こそ、「未来を考える」姿勢が大切だと感じています。

コロナ禍の対策として、三密の回避や移動の自粛など、いろいろと挙げられており、それなりの科学的根拠があり、それなりの効果は期待されています。ワクチンの開発・製造と接種も世界レベルで急ピッチで進んでいます。科学にもとづく対応、対策の重要さは、言わずもがなです。ただ、私たちは、これからこのパンデミックはどうなるのか、いつ終息（収束）するのかについて、明確な答えはまだ出せていません。経済への影響についても不透明なままです。時間スケールは異なりますが、気候変動（地球温暖化）の予測は、世界の研究者が結集して進めているIPCC（気候変動に関する政府間パネル）などの努力により、かなり精度の高いものになっています。地球全体の平均気温が人間活動により2℃以上高くなった場合には、地球

環境変化はかなり危機的状況になることを、かなりの説得力をもって予測しています（「安成通信」No.52、No.57など参照）。しかし、人間の知の及ばない不確定な部分はまだまだ大きく、私たちは、はかり知れない「未来」について、大きな不安をもったまま、生きています。

倫理学者の竹内整一は、2011年3月の東日本大震災と福島原発事故のクライシス（危機）に直面して、興味深いひとつのエッセイを残しています（竹内、2012）。以下に、このエッセイからいくつかの部分引用します。

「クライシス（Crisis）」という英語は、危機と同時に、転機・転換という含意がある。（中略）我々は今、この危機をどう乗り越えるかということと同時に、それをどう「よき」転機へとてんずることが出来るかということも問われているように思う」一方で、人知ではどうしようもない自然の振る舞いや大災害について、明治から昭和初めに活躍した物理学者の寺田寅彦の以下の文を引用しています。

「地震や風水の災禍の頻繁でしかも予測しがたい国土に住むものにとっては、天然の無常は遠い遠い祖先からの遺伝的記憶となつて五臓六腑にしみ渡っている」（寺田、1935）。寺田はこの文章を1933（昭和8）年の昭和三陸地震の直後に書いたようですが、「たとえ激甚災害や災禍があろうとも、『祖先からの遺伝的記憶』を思い起こしながら危機に立ち向かい、人は必ずや立ち直ることができるという確信の感情を寺田は持っていたようだ」と竹内は説明しています。

現在のコロナ禍も気候変動も、人間が大なり小なり自然に働きかけた結果としての自然の振る舞いとして現れています。その意味では、現在直面するこれらの課題を寺田がのべている自然の災禍と置き換えてみることが出来ます。「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈の度を増す」（寺田、1934）という寺田のことばも、今回のコロナ禍にも気候変動の影響にもあてはまっているようです。

私たち（とくに日本人）は、人知ではコントロールできない自然の前に、ある種の「無常感」を感じています。縄文時代からのアニミズムや奈良時代以降の仏教が私たちの精神のどこかにまだ息づいているからかもしれません。無常感とは「はかなし（はかない）」ということばに対応しますが、このことばは「はかりしれない」とつながっています。「はかる」は、科学知を含めて、まさに人間の多様な知（理性）の働きを総称しています（漢字では、計る、量る、測る、衡る、料る、付る、諮る、図る、画る、策る、謀る、などがあります）。いっぽうで、「はかなし」ということばには、「はかる」ことのできない何ものか（自然の大きな働きや、神仏など超越的な働き）への感受性や、けっして「はかる」ことのできないかけがえないもの、すなわち、今ここにあることの一回限りの尊さ・いとしさ・面白さ、といったものを感じ取る感情が含まれていること、そしてこのことばには、今われわれの突き当たっているクライシスを受けとめ乗りこえる大切な力があるように思うと、竹内は指摘しています。同時に、「はかなさ」の感受性は、「はかる」ことと単純な二者択一の問題ではないことも、追記されています。すなわち、「はかなさ」を感じつつも、同時に「はかる」行為も忘れてはならない、ということなのです。

私たち人類にとって「未来を考える」とは、さまざまな災禍が繰り返されつつも、生きとし生けるものを包含して進化したつづける地球の（そして宇宙の）「はかりしれなさ」に対する畏敬の感情をもちつつ、「はかる」行為を続け、あらたな可能性を考えていくことではないでしょうか。この場合、「考える」とは、「（単に）理屈をつけることではなく、（まず）深く感じるということである。深く感じる力を自分の中に育てられないと何も見えてこない」という詩人長田弘のことばもかみしめておきたいですね。

参考文献

- 竹内整一(2012)「はかなさ」の感受性へ——梅棹忠夫の「人類の未来」論に即して、梅棹忠夫著(小長谷有紀編) 梅棹忠夫の「人類の未来」——暗黒のかたの光明 勉誠出版 所収 pp.202-212.
- 寺田寅彦(1935)「日本人の自然観」小宮豊隆編「寺田寅彦随筆集第5巻」(1963年版) 岩波文庫 所収.
- 寺田寅彦(1934)「天災と国防」小宮豊隆編「寺田寅彦随筆集第5巻」(1963年版) 岩波文庫 所収.
- 長田弘(1997)「詩集「黙されたことば」みすず書房.
- 「安成通信」No.52 2020/01/06「地域と地球」再考「地球温暖化」に向き合って
- 「安成通信」No.57 2020/07/22「緑の回復」に向けて——「異常な夏」を考える



●安成 哲三 やすなり・てつぞう
京都大学大学院理学研究科博士課程修了後、京都大学東南アジア研究センター助手、筑波大学教授、名古屋大学
教授などを経て、2013年から人間文化研究機構総合地球環境学研究所の所長を務める。日本学術会議会員・
連携会員も務める。専門は気象学・気候学 地球環境学。筑波大学・名古屋大学名誉教授。Future Earth国際諮問
委員。